S III-3　NBMの発展可能性に向けた医療人類学の取り組み："証言に基づく医療"の事例紹介から

○鈴木勝己[1]　辻内琢也[2]　辻内優子[3]　熊野宏昭[3]
久保木富房[3]
[1]千葉大学大学院社会文化科学研究科健康環境論，[2]早稲田大学人間科学学術院健康福祉科学科，[3]東京大学大学院ストレス防御心身医学

近年の心身医学における物語に基づく医療（Narrative-Based Medicine；以下NBM）研究では，病者の語りを質的に分析していくことの意義が理解されつつある．NBM研究における医療人類学の貢献のひとつは，質的調査の枠組みの中において病者個人との交感的なかかわりを含めた医療者・病者・調査者の相互作用を理解しようとすることにあるだろう．医療人類学における病いの語り研究では，病者の社会文化的背景を考慮しつつ，調査の中で生じた相互作用を無視できないからである．本発表では，病いの語りの質的分析において医師と患者の治療関係が外部の第三者から確認されていくこと，すなわち語りの"証言（witness）"というべき現象が重要な意義を持つことを紹介する．病者・医師・第三者の相互作用は，病いの語りを精錬させ，病者が病いの専門家としての自負を持ち，過度な医療への依存から決別していく臨床プロセスを引き出していく可能性があるからである．病者の全人的理解を求める医療人類学は，病いの語りにおける"証言"という現象の理解を通して，NBMにおける治療行為の根源的意義を問いかけている．

S III-4　Narrative-based Diabetes Care,「語り」による糖尿病セルフケア支援の実践

○杉本正毅
医療法人同愛会熊谷外科病院糖尿病センター

糖尿病学は近年急速な進歩を遂げ，数多くの新薬が生まれ，治療の格段の進歩をもたらした．にもかかわらず糖尿病治療の現実はなお満足すべき成果を上げていない．それは「糖尿病という疾病が患者の日常生活と密接に結びつき，その治療には患者自身による日常の生活管理が求められるからではないか」と思われる．一方，こうした薬物療法の限界に対して，糖尿病に対する心理行動学的な研究が興り，患者の行動変化への介入・支援に大きな成果を上げてきた．同時にこうした心理行動学的アプローチは医療者-患者関係にも変化を求め，エンパワーメント法を生み出した．本法は患者の「自律性」「自己決定権」「協力的な医師-患者関係」を基本としており，多くの「主体的決定ができる患者」に恩恵をもたらした．しかし，エンパワーメントを支える「主体性原理」が「病気であることに主体的に向き合えない人」や「社会的環境条件に拘束されて，自らの生活態度を変容できない人」をかえって窮地に陥らせる場面も生まれ，セルフ・コントロール理念から落ちこぼれた患者をどう支援するかが大きな課題となっている．私たちは糖尿病患者に対してナラティヴ・アプローチを実践している．この方法は日常臨床の中で，可能な限り「患者の社会的文脈に注目し，対話を通じた相互検索・相互交流の中から，患者の糖尿病体験の意味を探り，互いの考えの交換を通じて，患者の病い体験に新しい意味を賦与しようとするものである．ナラティヴ・アプローチは「治療者-患者関係」を深め，関係性を通して，患者の意欲や力を引き出すことが可能であり，従来のアプローチ無効例にも大きな成果が期待されている．シンポジウムではその具体的な実践方法や印象深い症例を呈示したいと考えている．

Presented by Medical*Online